



TITLE:

京大上海センターニュースレター 第17号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第17号. 京大上海センターニュースレター 2004, 17

ISSUE DATE:

2004-08-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/26333>

RIGHT:

京大上海センターニュースレター

第 17 号 2004 年 8 月 9 日

京都大学経済学研究科上海センター

目次

○ 「現代資本主義と政策課題」大邱国際シンポジウムに参加して

「現代資本主義と政策課題」大邱国際シンポジウムに参加して

1997 年の金融危機以降、政治経済の再編成が続くなかで、韓国の経済学者の間で「新しい政治経済学」を求める動きが登場している。国立慶北大学校の金炳基(Hyung Kee Kim)教授の率いる研究グループ(NPES)もその一つで、レギュレーション理論に近い立場から、制度の分析や改革政策の探究をおこなおうとしている。このグループが学術助成金を受けて、7月の 29-30 日に「現代資本主義の主要傾向と政策課題」という国際シンポジウムを大邱の慶北大学キャンパスで開催した。フランスのグルノーブル III 大学から、ロラン・ボレリー(Roland Borrelly)教授が参加したが、日本からの参加者が 4人で、韓国と日本の研究との交流が主になったシンポジウムであった。

金教授は冒頭の報告「グローバル化、情報化時代と資本主義の多様性」で韓国側グループの研究計画を説明し、グローバル化のもとで各国の経済制度が収斂するという考えを批判し資本主義の多様性が存続すること、実情に即した制度改革の研究から市場原理主義的な方向に対抗する代案を構築したいと述べた。それに続いた関西大学の若森章孝教授は、「知識集約的資本主義への転換期における国家・ガバナンス・雇用政策」で、知識経済型資本主義が進展して技能の性質が変化するとともに雇用関係の内容も変化しはじめていること、また社会の変化のなかで国家にとっても多数のガバナンス・ネットワークの相互作用を促進・統合する「戦略的指導力」が重要になっていると論じた。この2つの基調的な報告のあとに、6つの各論にあたる報告があり、最後に会場のテーブルを円卓状に並べ替えて総括討論がおこなわれた。それぞれの報告にコメンテーターが配されて、有益な討論がおこなわれた。

韓国の「政治経済学研究グループ」からは、Bok Hyn Cho が「金融資本・金融システムの性質と金融主導型蓄積レジーム」、AeKyung Kim が「知識経済と技能形成における制度的補完性」を報告した。前者は、マルクスの資本循環論とポストケインジアン金融不安定性を結びつけながら「金融主導型蓄積レジーム」の形成を論じた。後者は、「Skill-biased Technological Change」という概念を導入しながら、ヒアリングと統計データによって韓国企業における技能形成を分析したものであった。また、本学大学院在籍の留学生梁峻豪(Jun-Ho Yang)君も「『制度的補完性』とマクロ経済的安定性の観点からみた韓国の金融危機」について報告した。これは、雇用の弾力性の小さい韓国型経済モデルが直接金融中心の金融システムと組み合わせられたことから生じる不安定性が金融危機の背後にあったとして、今後の経済制度形成においても補完的な両立性を重視するものであった。なお、梁君は提出ペーパーの翻訳版の準備と当日の通訳に大活躍し、参加者一同から感謝された。

本学の宇仁宏幸教授は、「東アジアにおける輸出主導型の成長と為替レートレジーム」(英文)で、日本、韓国、中国が輸出主導型成長の特徴を示す時期にそれぞれの通貨の(人為的な)過小評価が見

られることを指摘した。宇仁教授は、こうした成長戦略は労働生産性の上昇を国民の福祉に還元させないばかりでなく、国際的にも維持不可能な体制であるとして、国内市場志向型の成長と地域的な通貨調整レジームの組み合わせを推奨した。私の報告は経済学者らしからぬ日本政治論（「市場経済と社会民主主義―戦後日本の場合―」）で、日本社会党を例にとりて、古典的な社会主義から現代な社会民主主義への転換を資本主義論の視角からふりかえるとともに、転換後の2つの戦略（「社会コーポティズム戦略」と「市民社会戦略」）を説明した。なお、私は総括討論において、この2つの戦略の国際化について発言し、とくに東アジア地域において両者を結合して推進することを要請した。

グローバル化への原則的な批判者として登壇したのは、ボレリー教授であった。彼女は、「Is FDI fueling growth or crisis in the world economy?」で、直接資本投資が成長の源泉であるという見解をはげしく批判し、グローバル化の推進者の用いる美辞麗句に反して、利潤と搾取を求める資本の本性は変化していないと述べた。彼女はまた、総括討論においても、国際的な労働移動において、しばしば資本主義の犯罪的性格が露呈していることを指摘した。

総括討論では、上記の参加者以外にも、江原大学の Byung Chon Lee とソウル大学の Kun Lee が発言したが、十分な時間が取れなかったのが残念だった。

今回のシンポジウムでは、地域経済統合（調整）のあり方と労使関係の制度形成が喫緊の政策課題として登場した。私はこれらの政策課題のなかで安定性と公正性（そして両立性）を追求することが、韓国の研究グループのいう「代案」の形成になると思う。その意味で、たんなる研究交流にとどまらない有意義なシンポジウムであった。

（八木紀一郎）